子どもたちが安心して飲める牛乳を届ける

めぐみ野※1「角田丸森産牛乳」生産者の取り組み

牛乳のおいしさでメンバー（組合員）からの支持が高いみやぎ生協の「角田丸森産牛乳」。その牛乳が、東京電力福島第一原子力発電所事故による風評で苦境に立たされました。奮闘し続ける角田丸森産牛乳生産組合組合長の渡辺 博さんの取り組みを紹介します。

角田丸森産牛乳生産組合組合長の渡辺 博さん(右) とお連れ合い。牛舎にて。

●届けられなかった牛乳

「めぐみ野 角田丸森産牛乳」（以下、角田丸森産牛乳）は、産直の取り組みを始めて今年で 19 年になるみやぎ生協のロングセラー商品です。「おいしい牛乳は健康な牛から」との考えのもと、ゆったり動き回れる牛舎や自由に運動できる放牧場で、のびのびと牛を飼育しています。牛の体に負担がかかるので、高カロリーの餌を食べさせて乳脂肪を無理に高めるといったこともしていません。その牛乳が、震災で苦境に立たされました。

まずは、震災によるインフラのストップです。12 日後に電気が回復し、集乳は再開しましたが、牛乳に加工する東北森永乳業の仙台工場が津波で被災したため、工場が復旧するまでの 2 カ月間、「角田丸森産牛乳」は生産できませんでした。

●スウェーデンの対策を参考に

次に直面したのが原発事故による混乱でした。そんな中、渡辺さんのもとに、ある情報がもたらされます。「いつもアドバイスをくれる宮城県農政部の人が、震災から 1 カ月後ぐらいに、チェルノブイリ事故に対応したスウェーデンの酪農家の取り組みを教えてくれたんです」

渡辺さんら角田丸森産牛乳生産組合の生産者は、さっそく放射性物

質対策について学び始めました。「最初は難しかったのですが、その時点では、牧草を食べさせないことと除染が一番の対策だと分かりました」

5 月に宮城県から出された牧草給餌の自粛要請は、6 月、モニタリング検査の結果を受けてすぐに解除されましたが、渡辺さんらは 5 月に収穫した牧草は給餌しないことを決断。また、スウェーデンの対策に“除染は土を反転するのが一番効果的”とあるのを見て、牧草地と飼料用デントコーン畑の除染も始めました。徹底して取り組んだ結果、渡辺さんたちの飼料用デントコーン、ホールクロップサイレージ※2については、2011 年 8 月、宮城県のモニタリング検査で給餌 OK に。11 月から牛に食べさせ始めました。

●風評と戦う

「早め早めに放射性物質対策を行なったおかげで、角田丸森産牛乳は現在に至るまで放射性物質不検出です」と話す渡辺さん。ところが「風評被害は防ぎようがなかった」と肩を落とします。震災直前の共同購入（宅配）での 2011 年 2 月の実績 1 日平均 1,062 本と比べると、同年 8 月は 846 本、2012 年 6 月は 615 本にまで落ちています。店舗と合わせても、落ち込みは深刻でした。「普通のスーパーだったら、あんたんとこの牛乳はもういらないと言われていたと思う。でもみやぎ生協だから応援してくれるんですよね。職員の方や組合員さんが積極的に宣伝してくれたおかげで、店での販売は徐々に回復してきました。いまは何とか売り上げも伸びてきつつあります。子どもたちに安心して飲んでもらえる牛乳をこれからも届けていくため、辛抱しながら前に進もうと思っています」。渡辺さんは、そう決意を語ってくれました。

広い放牧場。ここで牛はのびのび過ごす。

※1 みやぎ生協の産直ブランドの名称。
※2 稲の実と茎葉を同時に収穫し発酵させた牛の飼料。